

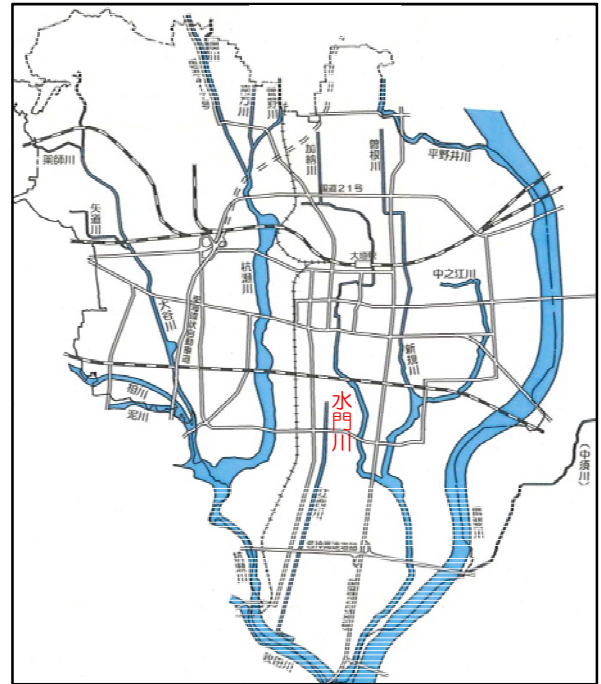
時代の流れを水面に映す水門川^{すいもんがわ}

【流域の概要】

水門川は、岐阜県大垣市笠縫町付近に源を発し、大垣市街を大垣城に沿うように流れています。
大垣市内の中之江川^{なかのえがわ}などの中小河川、排水路を合わせ、輪之内町塩喰地^{しおばみ}先で揖斐川の支流である牧田川に合流する、流域面積21Km²、河川延長14.5Kmの一級河川です。

【河川名の由来】

1650（慶安3年）、岐阜から養老まで一面の海となる大洪水^{けいあんたらんしのおおみず}（慶安寅年の大水）が発生。揖斐川の洪水による大垣城下への逆流を防ぐため、1653（承応2年）、大垣市今福地^{いまふく}内に「川口村水門」と呼ばれる閘門を築造し、水門川の名はここに由来しています。現在、「史跡旧水門跡」の石柱が建てられ、門樋跡は昔の面影はありませんが、その上流に架設されている「水門橋」にその名を残しています。



明治のはじめ頃の川口村水門（岐阜県歴史史料館）

【多発する浸水被害】

水門川流域は、近年、流域内の急激な宅地化に伴い、流域の持つ保水・遊水機能が極端に低下し、降った雨が短時間で河川へ流入するため、2002（平成14）年、2004（平成16）年、2005（平成17）年、2007（平成19）年、2013（平成25）年と、連続して浸水被害が発生しています。



水門橋（大垣市今福地先）



史跡旧水門跡の石柱



大垣市八島地区の浸水状況（平成16年）

【木曽三川がもたらす湧水の恵み】

西濃地域の大地を潤す揖斐川、長良川、木曽川の木曽三川の伏流水は、その中流域にあたる大垣市の街のいたるところで自噴水となり、豊かな自然の恵みをもたらしています。



水門川のほとりにある八幡神社（大垣市西外側町）



八幡神社の境内に湧き出す自噴水「大垣の湧水」

【船町港跡のたたずまいと奥の細道むすびの地】

大垣はかつて揖斐川、水門川、杭瀬川^{くいせがわ}などの河川を利用した舟運が盛んでした。江戸時代には川舟が行き交い、船問屋や倉庫が建ち並び、中でも、水門川は大垣に集散する物資の主要経路で、1883(明治16)年には桑名と結ぶ蒸気船も就航し、大垣と桑名・三河間の物資や人の輸送にも活躍しました。その賑わいは昭和の初めまで続きましたが、鉄道の発達とともに港の役割を終えていきました。

現在も船町港跡には、一艘の和船と燈台が残り、燈台の対岸には松尾芭蕉と谷木因の再会の様子を再現した銅像が建っています。



船町港跡



奥の細道むすびの地（松尾芭蕉と谷木因の銅像）



水の都おおがきたらい舟（平成25年10月6日撮影）



清流に生息する梅花藻（バイカモ）（平成25年10月6日撮影）